

いつも隣にある世界

Akihiro Kokazi



いつからだろう

いつからだろう

子供の頃歩いて数分の冒険の先

ふれあった自然が

当たり前へと姿を変えたのは

遠くに進めるようになるにつれて

忘れていく世界

1：足下の世界

すぐそこに世界が広がった
草木が光る世界
立ち止まって目を下ろすと広がる世界
その中をひたすら前を見ず
足下だけを見てた

前を見続けても気づけない世界
後ろをみても出会えない世界
今いる場所でそっと
生きている世界

明日へと記憶になる

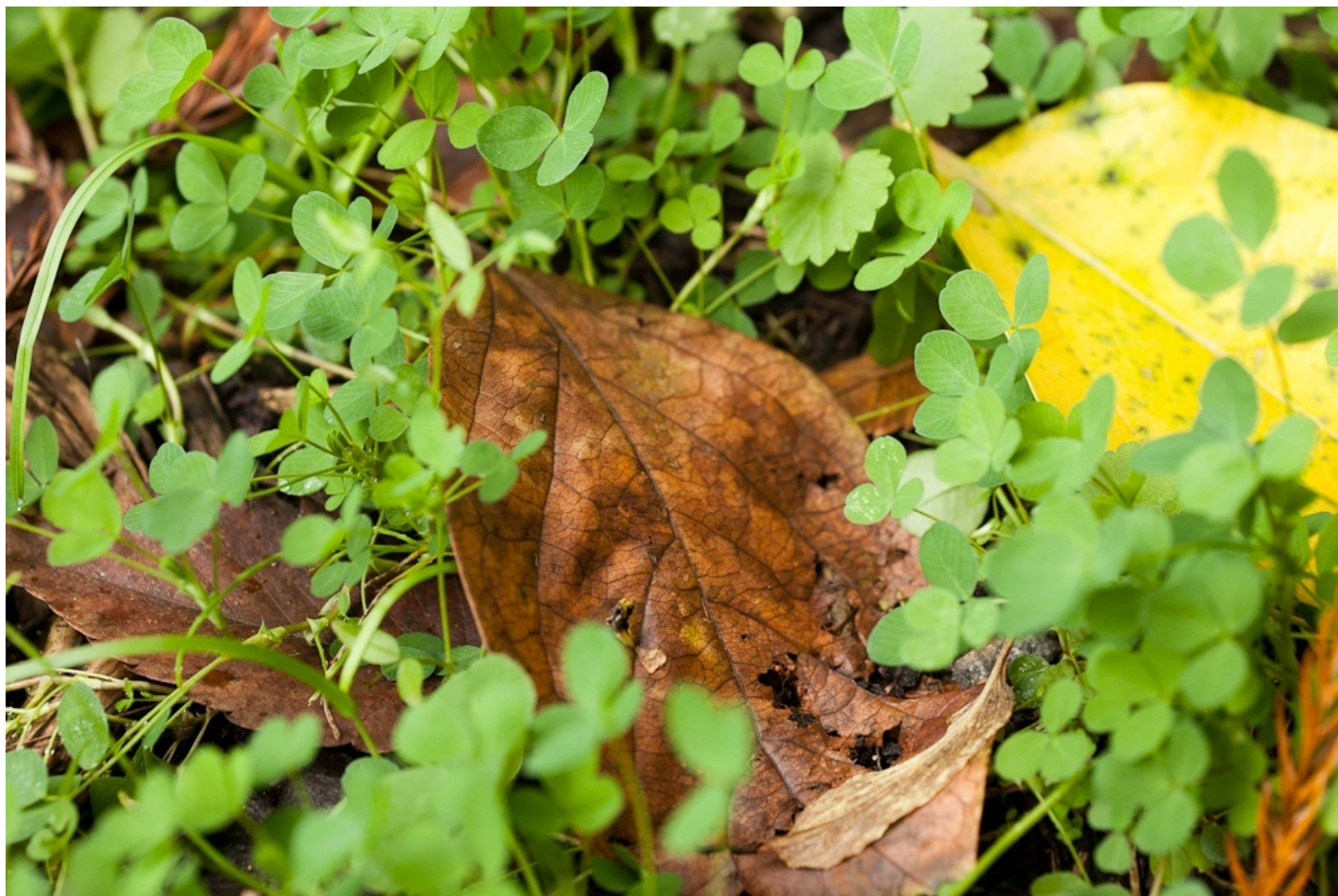




















2：光と向き合って

眩しい

目を閉じたいくなるような光

そんな光と向き合ってみる

木々は光り輝き

木の葉は透き通る

目が慣れてくる

遠くで光る

太陽

月

子供の頃手を伸ばした気持ちは

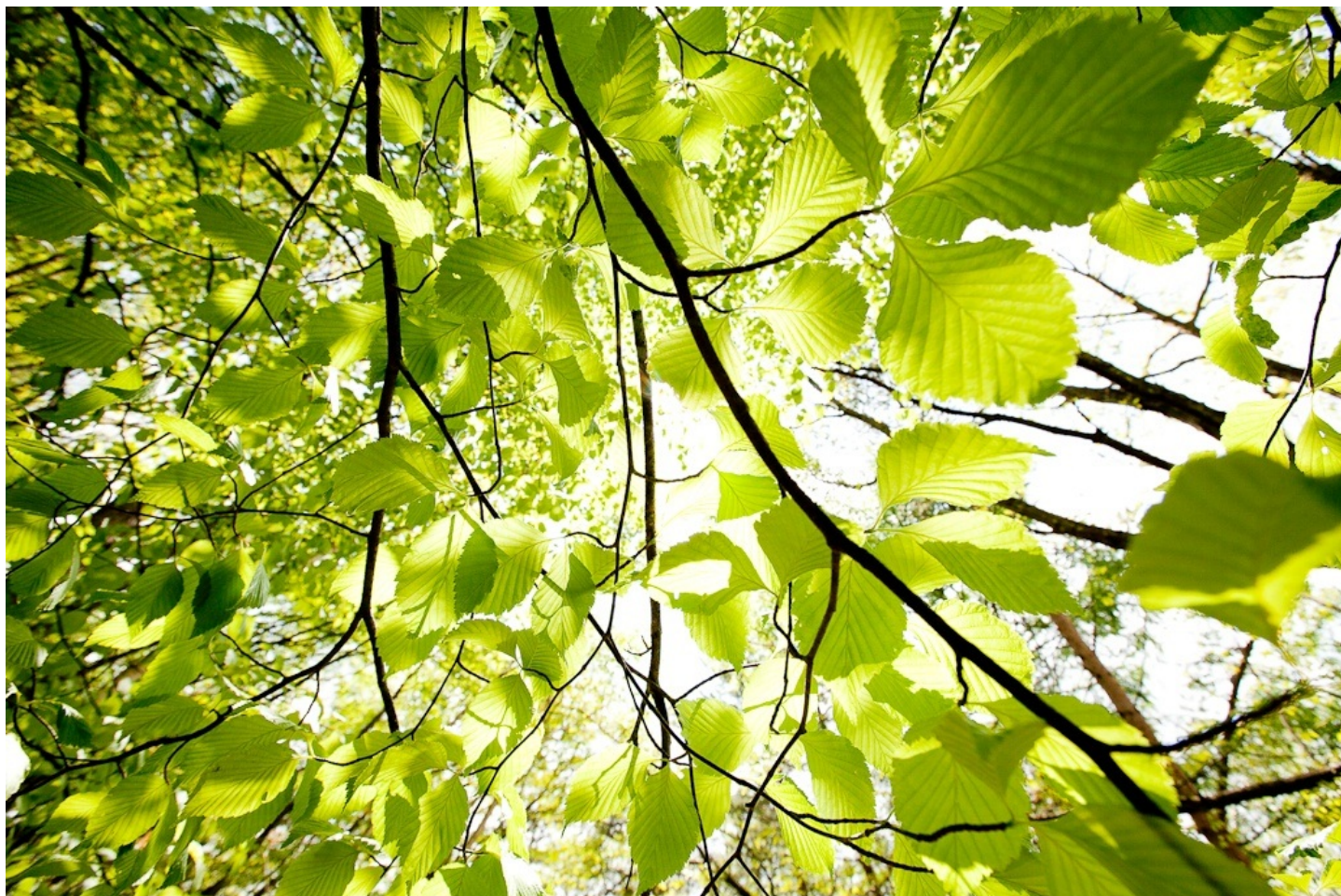
今も



















3 : 空へ

手を伸ばしてもつかめない空
流れる雲
降り注ぐ太陽

世界を包む世界
同じ空に包まれながら
僕と君はいつだって

違う世界をみている
違う空気に包まれている

僕がみた空は
君の知らない世界















いつもそこにある世界

あたりまえで忘れた世界

ふと輝きを見つけた瞬間

当たりの今が

かけがえのない

特別に変わる

写真,詩：小鍛治輝洋